
とある二つの領域交差

翔泳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある二つの領域交差

【Nコード】

N3571V

【作者名】

翔泳

【あらすじ】

／／人口二三〇万人の学園都市。無能力者から超能力者まで六つに分類されるこの街で、天城尊は無能力者だった。しかし、彼には『神の目』と言う特殊な力があつた。そんな天城尊は学校の下校途中に銀髪の少女と出会い、彼女は言う。「どうして君は魔術を知ってるの？」／／

／／学園都市の風紀を正す風紀委員。能力者と学生で構成されたその機関に所属する一人の少年、掛橋至。未能力者とされる彼の能力は『雲使い』。そんな彼は夏休み初日をもって風紀委員一七七支部

に異動となった。そこで御坂美琴と会い、少女は言う。「へえ、私
と戦いたいんだ」／／

科学と魔術、二つの領域が交わる時、物語は動き出す。

第一話 「天城尊」(前書き)

相変わらず文才に乏しいですが、リメイクです。題名も改めました。

第一話 「天城尊」

蒼天の如く澄み渡る瞳、遙か彼方から輝きを放つその力は『神の目』

その光は、神の体を与えられし天人である証。

1

『学園都市』

東京都の三分の一ほどの大きさに人口二三〇万人の人が住んでおり、最先端の科学技術が研究・運用されており、都市の内外では数十年以上の技術格差が存在すると言われている。

その実態は「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力の研究を行い、「授業の一環」として脳の開発を行っている都市だ。

能力者は、全体の六割を占める無能力者・低能力者・異能力者・強能力者・大能力者・学園都市に七人しかいない超能力者の六段階に分けられる。

「お前ら、明日から夏休みだから羽目外すじゃんよ」

そんな超能力の授業を行う教室に、教師である黄泉川愛穂の声が響く。

日付は七月二〇日、夏休み前日。

本来であるなら教師である黄泉川愛穂が言うべき言葉は、

『夏休みだからって羽目を外すなよ』

が、正しいのだろうか、

「偶には先生を困らせてみるじゃんよ」

学校自体のレベルはそう高い方ではないのだが、その中でもこのクラスは真面目過ぎるのだ。

アンチスキル
警備員に所属していると言う立場から、悪ガキどもの面倒を見る

のに手を焼いている反面、そうした問題児を預かるほど燃えてくる性質らしく、自身の受け持ちのクラスが非の打ちどころの無い優等生ばかりであることに若干物足りなさを感じていたりする。

（ホント、月詠センセのクラスは面白いガキどもに恵まれていいじゃんよ。ウチのクラスも少しは見習って欲しいじゃん）

一学期最後のホームルームが済んだこのクラスも、生徒が次々と帰っていく。

そんな中で、教室の端でただ一人椅子に座ったまま窓の外を眺めている生徒の姿があった。

（ああ、そう言えばウチのクラスにも一人いたじゃんよ）

窓側の席に座っているのは一人の少年だった。

短髪の黒髪に清楚ある顔立ちだが、右目に付けた黒い眼帯が印象の少年。

「天城尊^{あましろう みこと}。まだ帰らないじゃん？」

そう言いながら、黄泉川愛穂は天城尊へと近づいて行く。

天城尊は黄泉川愛穂が近づいてきても見向きもしない。開けた窓から入ってくる風を感じている様にも見える。

その風によって机の上に置いていたプリントが一枚宙を舞った。

「なんだ？ 身体検査の結果に気を落としてたじゃん？」^{システムスキャン}

黄泉川愛穂が手にした身体検査の結果表には、無能力者^{レベル0}と書かれている。

「べつにそんなんじや無いッスよ」^{レベル0}

無能力者は学園都市内にいる能力者の約六割を占めている。

「ならそんなに落ち込まなくていいじゃんよ」

「俺が落ち込んでる様に見えます？」

学園都市の中では能力のレベルが全てと言っても過言ではない。

能力が高ければ優秀。能力が無ければ落ち零れ。

「まあ、正直言つとそうは見えないじゃんね」

ただ、成績が悪いからと言って落ち込む人もいれば、何も思わない人もいる。

それは、学園都市の中も外も変わらない。

「そう言う事。だから気にせず先生は他の生徒にでも気を使っ
てくれ」

机に提げていた鞆を手に取り、天城尊は席を立った。不真面目そ
うに見える彼だったが、席を立った後きちゃんと椅子を中に入れる所
を見ると、一概にそうは言えないのかもしれない。

「私としてはクラスの皆も大切なんだが、お前の様な生徒の方が個
人的には好きじゃんよ」

恐らく聞こえてはいるだろうが、天城尊は教室を出る際に振り向
きはしなかった。鞆を持つ右手を肩に提げて、出て行く際にはドア
も閉めていく。

（相変わらず真面目なのか不真面目なのか分からないヤツじゃんよ。
まあ、私は世話がかかる方が好きだけどね）

抜群のプロポーションを持つていながら常にジャージ姿と言う黄
泉川愛穂は、教室を出て行く少年を見ながら、僅かに微笑んでいた。

＊

学校を出た天城尊は繁華街を歩いていた。

下校する生徒が周りに大勢いたが、明日から夏休みと言う事があ
り、ほとんどの生徒がテンションが高いように見える。

そんな中で天城尊は淡々と歩いていた。

無能力者^{レベル0}。学園都市にいる学生の六割を占める部類に属する彼だ
ったが、先ほども言っていた様に落ち込んだり、それを気にすると
いった素振りは全く見えなかった。

（レベルなんて俺には関係ねえ）

しかし、六段階に分けられた格付けは成績を示すと同時に、その
者の強さを表している。

無能力者が落ち零れ扱いされるように、強能力者^{レベル3}にもなるとエリ
ート扱いを受け始め、大能力者^{レベル4}では軍隊において戦術的価値を得ら

れる程の力とみなされる。また、学園都市に七人しかいない超能力^{レベル}者となれば、その力は一人で軍隊と対等に戦える程のモノになる。その為、低能力者がどう頑張っても上位能力者に勝てないのが現実だ。

ただ、物事には例外と言うモノが必ずと言っていいほど存在しているのは確かである。

繁華街を過ぎると、極端に人の数が減った。寮のある住宅街に向かう道には天城尊の姿しかなかった。

明日から夏休みと言う事もあって、学校から一直線に自宅へ向かう生徒は少ないのかもしれない。

日が少し暮れだし、少しずつ学園都市に夜が訪れようとしている。
(おかしい)

そう思ったのは、人氣が無くなって少し時間が経ってからだ。

(人所か、掃除ロボットの姿までないぞ)

学園都市の中は絶えずドラム式の掃除ロボットや警備ロボットが道を走り回っている。初めて見る人には不思議な光景かもしれないが、数ヶ月もすればその光景にもなれてくるだろう。

だが、いつも見慣れたロボットの姿すら辺りに見当たらない。

「どうなってる」

そう思った瞬間、

ドン、と裏路地の入り口から飛び出してきた何かとぶつかった。

「ガッ……」

真横からタックルされた天城尊は見事に道路へとダイブした。

「痛……なん、だ」

上半身を起こしながら、足元に目をやるとそこには白銀の少女が地面に倒れていた。

「痛たた……」

白銀のミディアムヘアだった。透き通る様な色にサラサラの髪質。真っ黒の修道服を身に纏っている所からシスターか何かだろうか。

「おいお前、大丈夫か」

え？　と言う表情で少女は天城尊と目を合わせた。

「なんで？　人と出会うハズなんて無いのに。もしかして周囲に張り巡らされた『人払い』の効力がなくなってるの??」

少女は仕切りに周囲を見回す。

両手と両膝をついて、左右前後おまけに空まで見上げた少女は、
「そんな事ない。『人払い』はまだ刻まれてる。なのにどうして君はこんな所にいるの??」

白銀に少女は本当に理解不能と言いたげに天城尊へと問いただす。
「なんでって言われても、俺の寮はあっちなんだな」

天城尊は道路の先を指差して言う。

「違う違う」

と、少女は首を横に振って

「私が訊きたいのはどうして『人払い』の術式が刻まれてる中にいるのかって話し」

少女にとって天城尊がこの場所にいる事が不思議らしい。

しかし、天城尊がこの場所にいるのは単に寮に帰る為でしかないのだが、

「本当、僕にも是非教えてもらいたいね」
ビクッと少女の体が動いた。

その声は裏路地の中から聞こえてきた。

カツカツ、と靴が地面を叩く音を響かせながら現れたのは、同じ様に黒い服、今度は神父服を纏った男だった。

赤い長髪に右の目元にはバーコードの刺青を入れ、左右の指には銀の指輪がメリケンの様に並び、耳には毒々しいピアスを付け、口にはゆらゆらと銜^{くわ}えたタバコが揺れている。

神父とは言えない男が立っていた。

「全く、どういう原理をしているのやら。この領域内でまさか一般人に出会うとは、これはこれは残念だね」

「君は逃げて」

少女はそう言いながら天城尊の前に立った。

「相手の狙いはこの私。関係の無い君まで危険な目に合う事はないじゃないと」

「邪魔者は排除するに限るね」

瞬間、男の吐き捨てたタバコが轟！ と爆発した。

「炎よ」

一直線に燃え上がった炎は剣を模^{かたど}る。

「全く不幸だね。こんな場面に遭遇してしまった君は」

天城尊は静かに立ち上がると、その場から動かなかった。少女が目の前に盾になるように立っていて、それでもその場から一步の動こうとしないのは、目の前の男からしてみれば恐ろしくなって逃げる事も出来ない、そう目に映っている事だろう。

「巨人に苦痛の贈り物を」

灼熱の炎剣を横殴りにし、その炎は弧を描いて少女の横を通過し天城尊へと向かった。

爆発。

衝撃による熱波や閃光、そして黒煙が吹き荒れる。

爆発事件の様に黒煙を上げるその場所には、炎の壁が出来ていた。摂氏三〇〇度を越える炎の中では何も残らない。

「やりすぎたか、な？」

などと呟きながら男は頭を掻くが、その表情からは言葉通りの心境とは思えない。

（まあ、人払いを刻んであるから人が集まる心配はないと思うが。殺す前になぜ人払いをすり抜けられたのか、確かめておくべきだったか）

と、男はここで不思議な光景を見た。

燃え上がる炎の手前。白銀の少女の視線が炎の中から離れようとしていない。

ただ、一点を見つめている。

「おっと、さすがに残酷すぎたか？」

男は少女が目の前の方の光景を悔やむ、或いはショックを受けている、そう思ったのだが、

「う、そ……」

少女がそう呟いた瞬間、

ゴワアツと炎が膨張し弾け跳んだ。

「なに……！？」

男の動きが一度硬直する。

「確かに不幸だな」

炎の中心だった場所から天城尊は現れた。

周囲の炎、黒煙諸共吹き飛ばす様に。

「でもそれは俺じゃない」

地面すら溶かし、一瞬で人を死に至らしめるハズの炎の中で、天城尊は自身の衣服すら何の変化もなく立ち尽くしている。

「それはお前だ、『魔術師』」

「く、貴様……なぜッ」

変化があったとしたら、それはただ一部分。

右目に取り付けられていた眼帯が外れているという事。

そこから見えるのは、蒼天の如く澄み渡る青い瞳。

「！？」

言葉を発してからは一瞬だった。

僅か数秒にも満たない間に天城尊は男の正面に立っていた。

人間の身体能力を超えた速度。

男が気が付いた時には、体は宙を舞い、視界には空が見えていた。

「俺は殺さない。だからとりあえず一発だ」

地面へと転がった男はピクリとも動かない。恐らく、既に意識を失っているのだろう。

その光景を見ていた少女は、天城尊の目を見ていた。

その瞳は澄み切った様に青く、離れているにも拘らず鏡の様に自分の姿が映っているのが分かりそうなくらいだった。

「で、お前は何なんだ」

少女がハツとした時には、天城尊は右目を瞑り、眼帯をつけている所だった。

「こいつが魔術師って事はお前もそっちの類なんだろ」

天城尊は親指で地面に倒れる男を指差す。

「どうして君は魔術を知ってるの？」

少女は絶えず不思議そうな目で天城尊を見つめていた。

「やっぱりお前もか」

「お前じゃないもん」

「は？」

「メルだよ。メル〃メリーロウ」

第一話 「天城尊」(後書き)

感想等ありましたら、よろしく願います。

第二話 「メルメリーロウ」(前書き)

お気に入り30件どうもありがとうございます。
ご期待に応えられる様に頑張ります。

第二話 「メル」メリーロウ」

2

とある学生寮の一室。

部屋の中にはベッドに支給品であるテレビ、本棚には教科書と漫画が少々。男子生徒一人暮らしにしては以外にも片付けの行き渡った部屋の中央には卓袱台が置かれてある。

勉強用の机は無い為、その卓袱台が食事用と勉強用の両方を兼用する形となっている。

そして現在、その卓袱台の正面には一人の少女が座っていた。
シスター。

漆黒の修道服に身を包んだ少女は見た目十四歳か十五歳と言った所か、今はフードを被っているが、その下には白銀のサラサラとしたシヨートヘアが隠れていて、顔を見ただけでもその肌の白さが分かる。

「麦茶しかねえぞ」

台所からお茶の入ったコップを両手に天城尊は卓袱台へと向かう。
横から見ると、少女はまるでお人形の様だった。

卓袱台の前に座り微動だにしないその姿は、原寸大の大きさに作られた部屋に置かれた一体の人形。

「ありがと」

言葉を発していなければ、そう疑ってしまいそうである。

コップを卓袱台へと置いた天城尊は少女の正面へと座った。

「さて、わざわざ部屋にまで連れて来たんだ、お前が何なのか話してもらおうぞ」

「メルだって言ってる。メル」メリーロウ。その前に教えて欲しいかも。どうして君は魔術を知ってるの？」

質問で返された。

「……質問してるのはこっちだぞ」

「その前にお互いの事知っておかないとダメだと思う。ほら、私も自己紹介したし」

会話を進める為にはメルの問題に答えた方が早いと悟った天城尊は、ハアと一つため息をついて、

「名前は天城尊。どうして魔術を知ってるのかは、昔に魔術師に会った事があるから、以上。はい、次そっちね」

「ムム、何か結構省略された感があるんだけど」

少し不満げな様子だったが、お互いの事を知っておくと言う条件は一応クリアしたので、メルも少しずつ話しを進めていった。

「魔術は知ってるみたいだから省略するけど、追って来た魔術師はイギリス清教の魔術師だよ。あ、イギリス清教ってのは魔術結社の一つね。で、私はその魔術師から逃げていた所で君にぶつかったて事」

メルは間にお茶を一口する。

「なんで逃げる必要があった。お前も魔術師なんだろう」

「うう、メルだって。一応私も魔術師だけど、向こうは天才って言われるほどの魔術師だし、私ほとんど魔術使えないから……」

やはりどこの世界でも出来るヤツと出来ないヤツってのがあるんだな、と改めて思う。

恐らく、学園都市で言うならメルは低能力者で、あの神父の様な魔術師は上位能力者みたいなモノなのだろう。

「よくここまで逃げ切れたな」

「うん、この服のお陰かも」

メルは両手を地面と平行になる様に挙げる。

「この服は一種の防御結界みたいなモノだから」

一見、何の変哲も無い修道服にも見えるのだが、

「アイギスをモチーフにしてるからね。本当は盾なんだけど、山羊の皮を無理やり衣服に織り込んでその魔術的意味を抽出してるから、『歩く教会』に比べれば防御力は全然だけどね」

「ふーん。まあ、今の俺にそんな事説明されても意味分かんないけどな。つか、根本的な事聞き忘れてたけど、そもそもお前なんで追われてる訳？ 悪い事でもしたのか？」

メルは小さく首を横に振った。

「魔術師の狙いは、私が持つてる『あるモノ』」
「あるモノ？」

「『神の涙』。私の周りではみんながそう呼んでた」

「ふーん。神の涙ね。」

「……なんかバカにしてない？」

ムスツとした表情でメルは言う。

「大丈夫大丈夫、バカにはしてない。で、それは今もお前が持つてるのか？」

「持つてるけど、見せろって言われても無理かも」

「ふーん。持つてるけど見せれないか」

天城尊はジト目でメルを見してみる。

「やっぱりバカにしてる」

いいもんいいもん、とメルは頬を膨らませ、残りのお茶を一気に飲み干す。自棄酒のマネをする小さな子供みたいだ。

「悪い悪い、冗談だよ。学園都市にいる他のヤツはどうか知らないけど、少なくとも俺はそっち系の話しは信じる数少ないタイプの人間だからな」

「どうして？」

信じたら信じたらで次は首を傾げてくる。

「俺は魔術を知ってるって言ってるだろ」

確かに、科学側の人間で魔術を知っている人間は少ないと思う。

何故なら、科学側の人間は例え目の前で不思議な現象が起こったとしても、それを魔術ではなく超能力と捉えてしまうからだ。全て科学で説明できてしまう。

だからこそ、天城尊の様に科学側に住んでいながら魔術を知る者は極端に少ないだろう。それこそ両手で数えられるほどの人数しか

ただ、知っているのと理解しているのでは根本的に違う。

理解していなければ、その魔術がどのようにして生み出されたか、などと言う高度な技術は到底無理な事である。

つまり、理解していなければ炎を出したとしても、それが魔術によるものか超能力によるものなのか、判断は出来ない。

にも拘らず目の前の少年は、それが魔術であると分かったのだ。

メルは思考する中、一つの事を思い出す。

「そうだ……君の目」

魔術師の炎の中から無傷で現れた瞬間、少年の右目は青く輝いていた。

「ああ。まあ、俺が魔術を知ってるって理由の一つにコイツがあるんだが」

そう言いながら、天城尊は右目に付けてある眼帯を取った。瞋っている右目を開くと、そこには蒼天が広がっていた。一切の汚れの無いその済んだ瞳には、その瞳を覗くメルの姿が映し出されている。「俺は『神の目』って呼んでる。これが何なのかは分からないが、この状態になると分かっちゃうんだ。あの炎が火のルーンを使用して生み出されているとか、そう言う事が。だからアイツが魔術師だって事も分かったし、術式が分かれば後は勝手に『神の目』がそれと同等の力を放って相殺してくれる」

「同等の力って……魔術を使ってるって事だよな？ 科学側の人間が、魔術を??」

本来魔術というものは、才能の無い人間がそれでも才能ある人間と対等になる為の技術、であり、才能のある者、能力者には魔術は使えない。

正しく言えば使えない事もないのだが、脳の回路が根本的に異なる為に使用すれば体に負荷が掛かり、死に至る場合がある。

だがしかし、実にあっさりと天城尊は言う。

「それも、問題ない。俺の中には魔術師と能力者の血が流れてるか」

＊

「見つけた」

雑居ビルの屋上から双眼鏡で眺めていた魔術師、ステイル「マゲ
又スは呟いた。

ギリギリと燃えるタバコを上下に揺らすのは彼の癖か。真っ黒の
神父服に身を包み、しゃがみ込んでいたステイルはゆっくりと立ち
上がった。

天城尊に殴られた頬の傷は既に無い。少しの間意識を失ってはい
たが、これくらいの傷なら魔術で直ぐに直せる。

「神裂。あれは一体なんだ？」

ステイルの直ぐ後ろには女の姿があつた。

腰まで届く長い黒髪をポニーテールにまとめ、背はステイルより
も頭一つ分小さかった。だが、ステイル自身が二メートルを超す身
長である事から、女性としては十分すぎるくらいの身長だ。

さらに加えて、腰に提げる日本刀はその自身の身長を優に超して
いる。

「学園都市ではそれぞれの力を六段階に分けているようですが、彼
はその中でも最低ランクの無能力者^{レベル0}と言う扱いになっています」

「冗談だろ？ とステイルは神裂を見る。

「僕はこれでも存在するルーン二四字を完全に解析し、新たに力あ
る六文字を開発した魔術師だ。無能力と分類される素人が、僕の炎
を避けられるハズが無い」

となると、考えられるのはあの光り。

一瞬の出来事だったが、少年の放った青い光には自分達側の気配
すら感じた。そして、人間の身体能力を超える速度での動き。それ
と似たものをステイルは知っている。

（あれだけのモノを無能力の部類に入れるとは、やはり何か裏があ
るか）

「そう言えば、あの子の方は大丈夫なのかい？」

ステイルは少し考えた後、神裂に訪ねた。

「ええ、今はぐっすりと眠ってますよ。ですが、時間がありません。一刻も早く私たちはアレを手に入れなければ」

そう言つて、神裂も六〇〇メートルは離れた部屋の中を見つめる。ステイルの様に双眼鏡を使わなくとも、視力八・〇の彼女には部屋中の様子がはっきりと見えていた。

その視界に映っているのは、白銀の髪 of 少女。

「神の涙」

「本当に、あの子を救つてやれるのか？」

ステイルの表情は前に見せた非道なモノではなかった。

「他の方法が見つからない以上、私たちは神の涙に賭ける他ありません。それであの子が救えるにせよ救えないにせよ、私たちがアレを手に入れなければ何も始まらないんですから」

分かつている。とステイルは静かに呟く。

「あの少年がどれだけ未知の存在であったとしても、僕は誓ったんだよ。あの子の為なら何だって燃やす。何だって焼き尽くす」

「では、参りましょう。いざとなれば、魔法名を名乗る事も考えておかねければなりませんね」

第二話 「メル＝メリーロウ」(後書き)

感想等ありましたら、よろしく願います。

第三話 「ステイル」マゲヌス（前書き）

ちょっとテンポ速めな感じです。

もう少し、ゆっくりと描写や会話を入れていった方がよかったのか
もしれません。

第三話 「ステイル」マグヌス」

3

「魔術師と能力者の血が流れてる？」

メルは首を傾げる。

「ああ、だから両方の素質を持ってもおかしくないだろ」

能力者は魔術を使えない。

元々魔術と言うのは、『才能ない人間』が『才能ある人間』、能力者と対等になる為に作られた技術である為、『才能ある人間』、能力者が『才能ない人間』の為に作り出された魔術を使用する事は出来ない。

脳の回路が違うのだ。

異なる回路に無理やり別の回路で使用される信号を送れば、体に負荷がかかり死亡してしまう可能性もある。

「でも、そんな事って、今までにそんな事例聞いた事ないよ」

「まあ、俺も魔術なんてモノを使った事がないから分からないが、この目はそう言うモノなんだよ。お前も見たら、あの魔術師の炎を相殺したのを」

「確かに見たけど、私は他人の術式の構成を解析出来るほど賢くないから。君がどんな力であるの炎を打ち消したかまでは分からないかも」

確かにそうだな、と天城尊は思う。

他人からみたら、ただ単に『打ち消した』と言う風にしか映らないだろう。

天城尊は外していた眼帯を右目につけた。

「で、お前はこれからどうする訳？」

残っていた麦茶を飲み干して天城尊は質問する。

「ここにいると、あの魔術師みたいな敵がくるから」

少女はあっさり言った。

「俺は魔術師は好きじゃないけど、追われてると分かっている女の子を追い払う事なんてしねえぞ。ほらこの力もあるし」

天城尊は右のこめかみ辺りを突きながら言う。

もし、あの魔術師が再び襲ってきたとしても、迎え撃つだけの力は有していると思う。

「でも、無制限じゃないよね」

ピク、と天城尊の手の動きが止まる。

こめかみに当てていた手をゆっくりと下ろして、

「やっぱ、分かるか」

「うん。そうじゃなかったら、そんな眼帯をする必要もないよね？」

あまりにも正確な解答だった。

神の目。天城尊はそう呼んでいるが、その力は相手の能力を相殺するだけではなく、もう一つの能力もプラスされる。

身体強化、と言うべきか。眼帯を取って神の目を発動している間は、どうしてもか身体能力も格段に向上するのだ。

「まあ、確かにこの力は無制限じゃない。ありがたい副産物のお陰で体への負担が大きいからか、数分ってトコしか持たないが、多少の調節は利くぞ」

「気持ちには嬉しいけど、関係の無い君をこれ以上巻き込めないから」少女は優しく言った。

そして、その表情に目を奪われていた為、天城尊は気が付かなかった。

窓の外から近づくその二つを。

バキン！ と窓が一斉に破壊された。

鋭い刃物か何かで切り刻まれた様にも見える。

衝撃で埃が舞い、天城尊の視界は一瞬巻き上がる煙で閉ざされた。

「な！？」

閉じた目を開けると、そこにメルの姿が無い。

「チッ！」

天城尊は窓側へと視線を送った。

案の定、そこには黒い修道服の衣装を纏った少女を抱きかかえる一人の女性の姿があった。

特徴的なのは、腰に提げる背丈よりも大きな一本の刀。日本人離れした長身に、腰まで伸びる黒髪はポニーテールで纏めてある。

「おい、テメエ！」

ダン！ と床を踏み砕きそうな音をたてて女性が消えた。瞬きをした瞬間にはその姿は窓の外にあり、数十メートル離れているハズのビルの屋上へと移動する。

「君の相手はこっちだよ」

声と同時に、一筋の炎が天城尊の頬を掠めるように窓の外へと消えていく。

「さっきの魔術師か」

天城尊が声の方向へと目を向けると、そこには炎の魔術師がいた。燃えるような赤色の髪に、口には相変わらずブラブラとタバコを揺らしている。

「本来なら、あれさえ回収できればそれでいいんだけどね。僕も負けたままじゃ気に食わないんでね」

魔術師は神父服の胸元へと手を入れた。

「ステイル＝マグヌス。と名乗りたい所だけど、ここは直戦場になる。ならばそれに相応しい名を名乗らないとね」

そこから取り出したのは無数のカード。その一枚一枚には奇妙な記号が描かれている。

「Fortis931」

言葉と同時に無数のカードが渦を巻くように部屋一面の壁に張り付いた。

ステイルのかざす手には渦を巻きながら炎が集まっていく。ただの塊であった炎は次第に形を作り始め、それは人の形へと変わる。

イノケンティウス

「魔女狩りの王。君の力は未知数だ。だからこそ全力で叩く。全力で燃やす。万が一君に僕達の邪魔をされないように、ここで燃やし

尽くす」

人の形を成した魔女狩りの王はその手に十字架を作り出した。罪人を裁く光りの十字架。自分自身が正しい、そんな意味すらこもっているようにも見える。

それに対して、天城尊も眼帯へと手を伸ばしていた。

「全く、あの時は感情押し殺して一発で済ませてやったのに、また目の前に現れるなんて」

天城尊はその眼帯をゆつくりと外していく。

そこから放たれる光は蒼天の如く澄み渡った青。

「俺は魔術師が嫌いだ。二度目は、知らねえぞ」

その目にはステイルが映し出されていた。

イノケンティウス
「魔女狩りの王！」

ステイルの雄たけびにもた声で魔女狩りの王は動き始めた。

右手に持った十字架を振りかざし、それを天城尊へと振り下ろす。

ゴアア！ 爆発が起きた。振り下ろした十字架と天城尊の手がぶつかり合った衝撃で生まれたモノだ。

ギリギリと不気味な音をたてる光りの十字架だが、以前の炎の様に消滅する気配が無い。天城尊に受け止められながらも、次々と新しい炎が生み出されているのだ。

（やはり無理か）

初めから分かっていた様に天城尊は思考する。

（術式の根源となっているのは、周囲に張り巡らされたルーン文字か。目の前にあるのは言わば夜の湖に映る月）

魔女狩りの王が力を入れたのか、或いは術者であるステイルが施したのか、天城尊に向ける炎の勢いが増していた。

「灰は灰に、塵は塵に」

広げた両手から炎を生み出しながら、ステイルは魔女狩りの王の隙間を塗って天城尊へと襲い掛かる。

炎の剣と魔女狩りの王の二重攻撃。

「吸血殺しの紅十字！」

二本の交差した炎剣が天城尊を襲った。

轟！ と火柱が起こった。天井にまで至ったそれは天井一帯に燃え広がる。

ここで初めてスプリンクラーが作動した。今まで反応しなかったのは、恐らくそうなる様に術式に細工をしてあったからだろう。それが、火柱によってスプリンクラーのヘッドが壊れ、そこから雨の様に水が降り注いでいる。

それでも魔女狩りの王の勢いが衰える事はない。

辺りに張り巡らされたルーンの刻印を消さない限り、魔女狩りの王が倒れる事はないからだ。

燃え上がる火柱を見つめ思う。魔女狩りの王と炎剣二つの同時攻撃で生き残れる者など何人いようか。

しかし気が付いてしまった。

その炎の中ではなく、魔女狩りの王の後ろ。一八〇度ほど移動した位置にあるその気配に。

「魔女狩りの王の攻撃を防ぎながら僕の攻撃をかわし、瞬時にして背後に回りこむとは、貴様化け物か」
イノケンティウス

それでも、ステイルは引かない。

目の前には、魔女狩りの王がいる。壁全体に張り巡らされたルーンの刻印を消さない限り、魔女狩りの王を倒す事など不可能だからだ。

「だが、いつまでそうしてられるか」

瞬間、ステイルの体が後方へと吹き飛んだ。

（な……に）

先ほどまで魔女狩りの王の後方へいた天城尊が目の前にいたのだ。（分かつてはいたが、これでは、神裂クラスじゃ、ないか）

壁にぶつかって地面へと倒れたステイルはそのまま動かなくなつた。

ステイルが倒れて、魔女狩りの王の勢いが弱くなる。

「ルーンは残ってるが、魔力を供給してくれる魔術師がいなくなっ

て威力が落ちたか」

天城尊は徐々に弱りつつある魔女狩りの王に軽く触れた。

「魔力がなくなれば、再生は不可能だ」

それは以前の炎の様に軽く消し飛んでしまった。

魔女狩りの王が消え、辺りで燃えていた炎も、スプリングラーから吹き出る水によって消火されていく。

それを見て天城尊は右目に眼帯を取り付けた。

「後は……」

天城尊はメルを連れて行った長髪の女性を思い返していた。

（あの女、俺と同様、いやそれ以上の身体能力を持つてるかもな）

部屋のベランダから隣のビルまでは二〇メートルはあるだろう。

そんな距離を例え少女であつたとしても人を一人担いで飛び移るとなれば、その身体能力は計り知れない。

と、視界の中で何かがゴソゴソと動いている。

「まだ、だ」

「脳は揺らしたと思ったんだけどな」

ゆらゆらとしながら立ち上がったステイルは、ふらつく足取りでドサつと後ろへともたれ掛かる。僅かに燃え残った本棚を支えにしたため、残っていた本が床へと数冊零れ落ちた。

天城尊の拳はステイルの顎を捉えていた。

激しく振動した脳は、それだけで意識を刈り取るには十分すぎる衝撃だつたのだが、それで尚立ち上がるステイルには、多少驚かされていた。

しかし、やはり立ち上がるのが精一杯。

手足はいう事を聞かず、背もたれなしでは自分の足で立つ事さえままならない状態である。

「何でそこまでする」

ステイル「マグヌスともう一人の女の目的はメルの持つ『神の涙』」

女がメルを浚っていった事からそれは間違いない事なのだが、そ

もそも何故二人はメルを持つ『神の涙』を狙っているのか。

「必要なのさ」

そう言うときステイルの目に力強さが戻っていく。

そして、その表情は以前見た非情なモノでない。何かを守りたい、
その心に決め込んでいる目だった。

「あの子を救う為には……」

その時、ステイルの言葉が止まる。

その数秒の間にステイルが何を思っていたのかは天城尊には分
らなかったが、何かを悔やむ様に歯を食いしばって言う。

「僕達には、神の涙が必要なんだ」

第三話 「ステイル」マグヌス」（後書き）

感想等があれば、よろしく願います。

第四話 「禁書目録」

神裂火織はとある廃墟のビルの入り口にいた。

腰まで届く長い黒髪に背丈より長い刀を腰に提げて、そして、その両手には漆黒の修道服に身を包んだ少女が抱きかかえられている。辺りにも同じ様に取り壊しの決まった建物が並んでおり、普段から人の気配は全く無い。

ビルの中へと入っていく神裂の足音だけが、異様に響いていた。元々、大きなオフィスか何かだったのだろう。広いスペースには柱が数本立ってあるだけで、他には何も無い。

その空間の先には一つの扉があった。

神裂は静かにその扉を開いた。

少し狭い空間だった。そこにはまだ机が二台ほど残っていたが、壁際に寄せられてある。廃墟なので壁はコンクリートだけの殺風景だ。

ただ、一つだけ目立っていると言えば、部屋の中央部分に設置されているベッドだ。

新しい物ではないが、この部屋には恐らく無かった物だろう。その上には少女が寝ていた。

白銀の髪の少女。

白い修道服を身に纏った、人形のような女の子だ。

神裂はその少女の隣にメルを下ろした。

白と黒。正反対の衣装を纏った二人は、まるで一人の人間の光と闇を表しているかの様にも見える。

同じ白銀の髪に同じ様な背丈。

「インデックス……」

神裂は白い修道服の少女を見て静かに呟く様に言った。

禁書目録と呼ばれる少女がいた。

眼に映る全ての物を完全に記憶してしまう『完全記憶能力』という特異体質を持ち、その頭の中には一〇三〇〇〇冊の魔道書が記憶されている。

魔道書と言うのは、言わば魔術の使用方法が記された書物だ。

その中でも『原典』になると、それ自体が強力な魔力を秘めており、読んだ者は狂死するほどの悪影響を持つ危険な書物となる。

そんな目を通してだけでも魂が汚れる、と指定された魔道書を一〇三〇〇〇冊も頭に記憶している少女。

それ故に、突きつけられる現実。

「あの子は、一年周期に記憶を消さなければならんだよ」

ステイルは悲しそうに、全てを憎む様な表情で言う。

「汚染されてしまった記憶を消さないと、あの子は死んでしまう」

言う様に、原典は読んだ者が狂死してもおかしくないほどの『毒』がある。そんな物を頭の中に一〇三〇〇〇冊も所有しているとすれば、どうなるのか。

「その、記憶を消す事とあいつの神の涙がどう関係あるんだ」

「僕達は、一体どれだけあの子の記憶を奪ったと思う。一緒に過ごしてきた記憶を奪う、忘れられる、どれだけ約束しても、あの子が目覚めた時にはゼロになっているんだ。そんな事は僕達にはもう、耐えられない。だからこそ、神の涙が必要なのだ。あらゆる傷を癒し、毒を洗い流し、浄化する、それが神の涙」

なるほど、と天城尊は始めて理解した。

「つまり神の涙を使って、その子の頭の中にある毒を全て浄化してしまうと言う訳か」

一〇三〇〇〇冊の魔道書によって汚染されてしまった一年間の記憶。それによって脳が圧迫されてしまっているらしく、インデックスと言う少女を苦しめていると言う訳らしい。

天城尊も、何となく状況は理解出来ていた。

だが、納得のいかない部分がある。

「なら、何であいつを追いかける必要がある。素直に話して助けてもらって事は出来なかったのか」

それが一番理解しがたい部分である。

天城尊はメル「メリーロウと数時間程度しか一緒に居なかったが、あの少女がその様なお願いを断わるような人間には見えない。

寧ろ、そう言う事であれば、喜んで力を貸す様なヤツに見える。

「あれの生い立ちには、少々問題があつてね。両親を魔術師に殺されてるんだよ」

ピク、と天城尊が反応する。

「それがショックだったのか、あれも記憶を失って、いや忘れていたと言った方がいいかな。僕達イギリス清教^{ネセサリウス}必要悪の教会が保護していたのさ」

少しずつ脳震盪の影響が取れてきたのか、ステイルの口調が滑らかなモノになっていく。それでも足にまだダメージが残っているのか、体は本棚に預けたままだ。

「それが、一ヶ月ほど前になって記憶を取り戻した」

「……だから逃げた、か」

「そりやそうだろう。気が付いたら辺りは親を殺した魔術師ばかり。それどころか、自分も魔術師ときたら、まともな神経じゃいられないだろうからね」

天城尊は思い返すが、メルがその様な心境であつたようには見えなかった。或いはメル自身がそう見えないように振舞っていただけなのか、それは分からないが。

「だったら、なんでそうなる前にあいつに頼まなかった。思い出すまでは同じ組織にいたんだろう」

「後から教えられたのさ。あれにそんな力があるという事にね」

まさに、悪循環というべきか。

記憶を取り戻したメルは自分の持っている力を知っていたのだらう。

そして、周りには自分の親を殺した魔術師。

さらに、ステイル達はメルが逃げ出した後に、インデックスと言う少女を救う力がメルにある事を知らされた。

メルは何故ステイル達が『神の涙』を必要としているか知らない。もし、理由を知っていたら力を貸していたかもしれない。

天城尊は少しの時間考えた。

そして、

「場所を教えろ、魔術師」

静かにステイルに告げる。

「貴様、この期に及んでまだ」

「バカか、お前は」

ゆっくりと破壊された窓側へと向かう。

そこからは夜の空が見えていた。満月ではなかったが、完全下校時刻を過ぎた学園都市は以外と明かりが少ない。その為、都市部にしては夜空の星が多く見えたりする。

その中に、青い星があった。

透き通るような青は夜空からではなく、その星達を下界から見上げる形で光っていた。

「助きたいんだろ。俺がアイツに説明した方が、お前たちが言うよりもうまく行くはずだ」

天城尊は少なくともステイルやもう一人の魔術師よりもメル信用されているだろう。まだ、時間は浅いが、確実にその方がメルを説得できる可能性が高い。

（だが、皮肉だな）

「俺が魔術師を助ける事になるなんてな」

鼻で笑う様に呟いた言葉は、ステイルには聞こえていなかった。

（俺の親も殺した魔術師をな）

天城尊はステイルに言われるままに学園都市を移動していた。

「おい、貴様！ もう少し安全に移動できないのか！？」

「悪いな、こんな移動の仕方は初めてなんでね」

天城尊は飛んでいた。

ビルの屋上から隣の屋上ではなく、出来る限り遠くのビルまで飛び移る。飛び移るビルが無ければ、地面に向かってダイブ。

それも二メートルを超すステイルと肩に担ぎながら、それらの芸当をこなしている。

「君は聖人か何か？ 僕の知っている者でこんな移動を思いつくのは神裂くらいだよ」

「聖人？」

天城尊はなるべく道を使わず、ビルの屋上を使用するようにしていた。いくら完全下校時刻を過ぎているとは言え、夜の学園都市には学生が屯している。

こんな様子を見られても、この学園都市では何の心配も無いだろうが、念には念を入れてだ。

ステイルはこの街の人間ではないのだから。

そんな調子で移動を続けながら、天城尊はステイルに問いかけていた。

「何だい？ 魔術についてある程度知識があるようだったから、知っているのかと思っただけだ」

「生憎、ちよつとした事情で魔術師の存在を知っているだけだよ」

「なるほどね。聖人って言うのは世界に二〇人といないとされる、生まれた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間の事だ。ちなみに神の子くらいは知っているだろ？ その人間は『神の力』をその身に宿し、聖人である証『^{ステイグマ}聖痕』を開放する事によって一時的に人間を超えた力を使うことができる。それこそ今の君みたいだね」

スピードに慣れたのか、ステイルは普通に話すようになった。

下を向いたままと言う変な体勢ではあるが、まだまともに走る事が出来ないと自覚しているのか、文句は一言も発しない。

「それはそうと、君のその力は何だい？ 聖人でもない、かと言って君のこの学園都市での評価はあまりにも低い^{レベル}」

天城尊の評価は無能力者だ。

それもこれも普段は眼帯を外す事がないので、神の目の力は発動させていないからだろう。それでも能力ゼロと言うのは案外、能力者としての才能が無いのかもしれないが。

「まあ、数分前まで敵だったお前に教える様な力じゃないって事は確かだな」

「……それはそうだろうね。寧ろそちらの方が僕にとってもいい。あまり馴れ合うのは好きじゃないんでね」

少し残念そうにも聞こえなくはなかったが、本心は混ざっているのだろう。

そこからの会話は減った。

目的の雑居ビルまでに話した事と言えば、ステイルの「見えたよ」と言う言葉くらいだろう。

ビルの入り口近くまで来ると、天城尊はステイルを下ろして眼帯をつけた。

ステイルは完全に回復する様な時間は経っていなかったが、どうやら普通に歩く事は出来るみたいだ。

ビルの中に入ってから最終無言だった。本当に馴れ合うつもりはないらしい。先ほどまで並程度に会話していたのがウソの様だ。

ギギッとステイルが古びた扉を開けると、そこは小さな空間だった。ただコンクリートだけが見える殺風景な部屋の真ん中辺りには、一つのベッドがあり、そこには二人の少女が眠っていた。

白と黒。

全くの正反対の衣服を纏った少女。

黒い修道服を着ているのはメルだ。

そして、白い修道服を着ているのは、彼女がインデックスだろう。

カタ、とベッドの脇に腰掛けていた女性が立ち上がった。

「ステイル。どう言う事ですか？」

彼女はステイルの後に続いて入ってきた天城尊について訪ねている様だった。

「問題ないよ、神裂。彼が、それを説得してくれるみたいなんでね」
神裂は静かに、そうですか、と呟くと再び腰を下ろした。

「あの、白いのがインデックスか」

「ああ、そうだ。あの子が禁書目録だ」

その少女は見た目はメルと同様一四や一五歳と言った所だろう。
メルと同じ様な髪の色に同じ様な背丈。

スヤスヤと眠る少女は、とても頭の中に一〇三〇〇〇冊もの魔道書を保管し、その毒によって蝕まれている様には見えなかった。

「さて、早速お願いできるかい？ 僕達は一刻も早くその子を救ってあげたいんだ」

ステイルは静かにそう告げる。

言葉通り、天城尊はインデックスの隣で眠るメルの傍へと歩いていった。

「おい、起きるんだ」

体を揺らすと、すんなりメルは目を覚ました。

「んー、何？ ご飯には、まだ早いよお。ってあれ？ 君は……ッ！？」

メルは天城尊の背後にいる魔術師達に気が付いた。

「なんで魔術師が……そうか、私、君の部屋から連れて行かれて、それから」

そこで、天城尊が口元で一指し指を立てている事に気が付いた。
「後ろを見るんだ」

そう言われてメルが後ろを見ると、何度か見た事がある少女の寝顔があった。

「あの魔術師達はその子を救う為に、君の『神の涙』が必要だったみたいなんだ」

「この子を？」

「ええ」

そう答えたのは神裂だった。

「本当は私たちは貴方と穏便に話しをしたかった。ですが、私たちが必要悪の教会に所属しているとネセサリウス言う立場上、そう簡単に事を運ぶ事が出来なかったのです。どうか、その子を、インデックスを助ける為に力を貸して下さい」

率直な彼女の気持ちだったのだろう。

その表情に微塵のウソもない。真っ直ぐな目でメルを見つめていた。

「そう言う事だ。お前の両親の事も聞いている。でも、その子はお前の力で救えるかもしれねえんだ」

複雑な心境なのかもしれない。

目の前の少女は魔術師なのだ。自分の両親を殺した魔術師ではないが、魔術師なのだ。

メルは俯いて少しだけ考えていたが、スッと顔を上げると、

「メルだって言ってる。そう言ってくれないと、言う通りにしないかも」

「お前な」

「分かっている、冗談だよ。私に救えるかもしれないんだよね」

メルはそう言うと、インデックスに正対した。ベッドの上を這ってインデックスの顔の近くに寄って行くと、

まるで、教会で祈りを捧げるシスターの様に両手を合わせた。

その姿はとても様になっていて、改めて彼女がシスターである事を認識させてくれる。

メルは手を合わせたまま目を瞑る。何か唱える訳でもなく、祈りを捧げる様に。

ポツリ、と一滴の光が零れた。

祈るメルの瞳から零れ落ちた、一滴の涙。

それが、神の涙。

あらゆる傷を癒し、毒を洗い流し、浄化する神秘の滴。
不思議な光を放つその滴は、インデックスの口元へと落ち、
そして……

第四話 「禁書目録」(後書き)

感想等ありましたら、よろしく願います

第五話 「自動書記」(前書き)

我ながらなかなか強引に持つて行きましたね。
相変わらず話しのテンポは速いです

第五話 「自動書記」

5

びくん、とインデックスの体が反応した。

メルの瞳から流れ落ちた滴が、インデックスの中へと浸透して行く。

あらゆる傷を癒し、毒を洗い流し、浄化する『神の涙』。

一〇三〇〇〇冊の魔道書によって汚染されたインデックスの一年間の記憶が、その力により洗い流されて行く。

ギシギシとインデックスの体が震えていた。

メルの持つている力が、インデックスの頭の中にある毒を洗い流している。

「……………おい」

ステイルが呟いた。

「おい貴様！ 何をしたんだ！」

慌てふためく様にステイルが叫んだ。

その言葉の先にはインデックスの傍でキョトンとしたまま座り込んでいるメルの姿がある。

と、

隣で寝ているインデックスの呼吸が荒く、異常な事に気が付いた。目を閉じたまま、胸の部分が大きく上下している。

それは、頭の中の毒を洗い流している、と言うレベルではなく、それこそ何か発作の様なモノが起きている様だった。

「そんな……………確かに神の涙は効果を現したハズ、なのに、どうして処置を施したはずのメルも目の前の状況が理解できないでいる。」

「クソ、この発作……………何故！？ あの子の汚染された記憶は浄化されたハズだ」

「ではインデックスの記憶は汚染されていなくとも、脳を圧迫させ

ていたという事ですか!？」

ステイルと神裂の動揺した声が響く。

インデックスを苦しめていたモノは取り除かれていなかった。
と言うよりも、取り除いたが問題は解決しなかったのだ。

メルの話しからも、インデックスの記憶を汚染していた『毒』の
浄化には成功していた。

ステイルの話しても、その『毒』を浄化する事が出来れば、イン
デックスを救う事が出来ると言っていた。

「例えそうだとしても早すぎる。記憶の消去までまだ一〇日あるハ
ズだ。なのに、最後の発作が何故今なんだ!？」

しかし、それだけでは、インデックスを救う事は出来なかった。
寧ろ、その時を早めてしまっている。

「う……ッ」

インデックスの口から声が漏れた。

その声を聞くと、ステイルは慌てる所が逆に冷静になり、何かを
決め込んだ。

「退くんだ」

インデックスの傍に座っていたメルを払いのけると、ステイルは
胸元から十字架を取り出した。

「うわぁッ」

ベッドから落ちそうになったメルを天城尊は受け止める。言うま
でもないが、メルの体はとても軽かった。

「神裂、この子の記憶を、殺すよ」

無言で神裂も頷くと、ステイルはベッドから離れ、壁に何かを書
き始めた。恐らく、インデックスの記憶を消す為の準備をしている
のだろう。

白いチョークの様なモノを使って、模様を書き上げていく。

「おい、どう言う事なんだ?」

メルを地面に下ろすと、率直に質問をした。

「分からない。でも、『神の涙』が効いていない訳じゃないと思う」

メルの声は少し落ち込んでいる様にも聞こえた。親を魔術師に殺されていながら、魔術師を救う為に使った自分の力。それでも、目の前の少女を救う事が出来なかった。

複雑な心境だろう。

しかし、そうなつてくるとインデックスを苦しめているモノは一体何なのか。

天城尊はふと少女を見た。

「……おい、お前の『神の涙』は呪いとかそういう類にも効くのか？」

「うん。まだ使った事は無いけど、そう言うモノも浄化出来ると思う」

なるほど、と天城尊は呟き、

「なら、呪いじゃねえんだよな」

天城尊はベッドへと近づくと、そのままインデックスを見下ろした。

少女は絶えず苦しそうに呼吸をしている。

そもそもこんな場面を目の前にして、どうしてこんなにも冷静でいられるのか、自分自身でも分からなかったが、もしかしたら相手が魔術師だからかもしれない。

（そんな事は今はどうでもいいのか）

天城尊はその少女の口元を眺めて、

「おい、炎の魔術師」

「何だい？ 邪魔しないでくれるかな。僕は急いでるんだよ」

ステイルは見向きもしないで、手を進める。

慌てる様な素振りは見せないが、内心ではそうでは無いだろう。

予想外の出来事に、予想外の発作。冷静を装っているだけで、恐らくは焦っている。

それを分かっているながらも、天城尊は続ける。

「本当にこの子は記憶を汚染されていたのか？」

「……どう言う事だい」

「そもそも話し、そんな事どうやって知った？」

「必要悪の教会。私たちの所属する教会からですが、それが？」

「なるほどね。ならもう一つ。魔道書を記憶するのに何か特別な事をしないといけないのか？ 例えば、何か体に刻まないといけないとか」

「この子は特別です。インデックスは完全記憶能力と言う力を持ち、尚且つ魔道書の毒に耐えられるだけの素質があった。ですが、それが何だと言うのです？」

ステイルは最早聞く耳を持たずに作業を続けていた。

何故、天城尊が急にこの様な事を聞き始めたのか？

ただ興味があったと言う理由ではない。

天城尊は見てしまったからだ。

偶然にも、ステイルや神裂がいる位置からでは見えず、インデックスの足側にいた天城尊からしか見えなかった、それを。

「つまりだ」

天城尊は眼帯を外した。

その青く光る瞳の先に見るものは、

「こう言う事だ」

天城尊は自分の人差し指と中指を立ててインデックスの口の中へと滑り込ませた。

「な！？」

神裂が驚くと同時に、ステイルも叫ぶ。

「貴様！ 何を」

瞬間、

バチン！ と天城尊の体が後方へと吹き飛ばされた。

尻餅をついた天城尊は腰の辺りを押さえながら立ち上がり、その痛みに気が付いた。

「痛……まさか、この状態で血を見るとは」

人差し指が僅かに裂け、血がポタポタと地面へと流れ落ちていた。
「何が……」

驚きの表情を浮かべていたのはステイルだった。

手に持っていた白いチョークの様なモノを地面に落とすほど、彼の心は動揺していた。

その目の前にいる者。

白い修道服を身に纏い。先ほどまで目も瞑り、苦しんでいた少女が、

「警告、第三章第二節。第一から第三までの全結界を貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能、現状一〇三〇〇〇冊の『書庫』の保護の為、侵入者の迎撃を優先します」

それは、まさに感情の無い機械の様だった。

操り人形のように起き上がったインデックスは、何かを読み上げるように言葉を並べていく。

だが、ステイルはその異様な光景に驚いていたのではない。

もつと根本的な部分。

「何故あの子が魔術を!？」

インデックスの瞳に浮かび上がっていた、血のように真っ赤な魔法陣。

「アイツは魔術師なんだろ。なんで魔術が使えたくらいで驚くんだ」

「インデックスには魔術は使えないんです。あの子には魔力がないから」

「それも教会から教えられたのか」

神裂の言葉が止まった。

「いいか、さっき俺が壊したのはアイツの体に刻まれていた魔術、

『一年毎に記憶を消さなければならぬ』体質にしちまう魔術だ。

これが、お前らの言っていた『毒』の正体だ」

「魔術だと? そんなモノだれが」

と、そこでステイルはさっきのこの少年の言葉を思い返していた。

「まさか……教会が。いや、そんな事……、それに何故貴様にそんなモノがあの子の体に刻まれている事が分かる!？」

「見つけたのは偶々だ。偶然、アイツの口の中が見えた。そこにあ

「つたんだよ、不気味に黒ずんだ一文字の紋章^{マーク}がな」

「だが、何故その正体が分かる!？」

「俺の力はそう言う力なんだよ。お前も体験しただろう」
ゆっくりと話している時間はなさそうだった。

「『書庫』内の一〇三〇〇冊により防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算」

「体質を変えちまう様な魔術じゃ『神の涙』で浄化したって治るはずがねえ。お前たちは騙されてたんだよ」

「侵入者に対して最も有効な魔術の組み込みに成功。第一一条第一五節。『これより神の支配を告げる』発動まで六秒」

インデックスの両目にあつた二つの魔法陣が一気に拡大した。

二つの魔法陣は重なり合うように円を描き、目を中心として固定されているのか、インデックスの顔を少し動かたびに魔法陣もそれに合わせて動いている。

バチバチ! と魔法陣が電気を帯びたように激しく光り始め、瞬間、七色の光りが天城尊を襲った。

魔法陣の円周から放たれた光りは、一点に集中されて一つの柱となつて七つの光りを放っている。

天城尊はその光りの柱を受け止める前に、メルを横へ突き飛ばした。

ガリガリガリ! と壁を強引に削り取る様な音が鳴った。

前に突き出した両手と七つの光りがぶつかり合う音。正確には、天城尊の力が七つの光りを打ち消している音だ。

(なんだ、これは……!?)

状態としては不思議な光景だった。

天城尊によつて防がれている光りは、飛び散る事をしない。壁に当たった水が飛び散るのではなく、まるで光りの先に鏡を用意して、反射させている様にも見える。

しかし、ギリギリと地面を足が滑っていく。

(最早俺の頭では理解出来ない……ッ)

例え自分の頭で理解出来なかったとしても、その力はあらゆる魔術や能力分析し、同等の力を持ってそれを相殺する。

神の目。

その力を天城尊が持つていなければ、たったの一秒で天城尊の体は無くなっていただろう。

「あ……あ……」

横に目線を移せば、先ほど突き飛ばしたメルが心配そうな表情でこちらを見ていた。

何かを言いたいのか、しかし言葉に現せていない。

と、

グラ、と天城尊の視界が揺らいだ。

「がああッ！」

ジユウ、と光りの柱を受け止める手に異変が起きた。

まるで焼ける様な音。さらには、数秒おきに指や手の甲、腕の部分にまで細かな切り傷が生まれ始めていた。

（さすがに……使い過ぎた、か）

頭がフラフラとしてきた。

踏ん張る足にも力がいらなくなって来ている。

思えば、夕暮れにスタイルとの戦闘を始めに、今日すでに四回も神の目を発動していた。

一回一回の使用時間はそれほど長くなかったが、回数をこなしてしまえばその反動はいつか体にやってくる。

（ダメだ、今ここで切れれば……）

最悪のイメージが頭を過ぎった。

神の目の発動が切れ、光りの柱に貫かれる。

そうなれば、救う救わないの話ではない。

が、

「Salvare000！」

七本のワイヤーが床面を走り、インデックスの下にあるベッドの足場を崩した。

ガクン、と頭の下がったベッドにつられてインデックスの姿勢が後方に倒れる。放たれていた七色の光は天城尊を外れ、ビルの上部を突き破った。

真ん中部分だけくり貫かれた様な形になったビルは崩壊せずに形を止めている。

ガクつと膝を着いた天城尊にステイルは駆けつけ、

「おい能力者！ あの子を救えるのか！？ 貴様はその目で何を見た！？」

制服の襟を部分を掴んでステイルは叫ぶ。

その表情は必死だった。

ステイルはインデックスを救いたかったのだ。一年毎に記憶を消さなければならぬ運命を背負った少女を、ただ救いたかった。

その為に、手に入れた『神の涙』。その希望すら絶たれ、一度は再び記憶を消す事を選ぼうとした。

しかし、また目の前に僅かな希望が見えたのだ。

この少年なら、あの子を助けられるかもしれない、と。

「一瞬でいい……隙があれば、助けてみせる！」

「インケンティウス
魔女狩りの王！」

目の前で炎が渦を巻いたのはインデックスが体勢を立て直したのと同時だった。

声と同時にルーンの刻印がばら撒かれ、

炎の巨人が光の盾となった。

ガリガリと音を絶てて炎すら削り取ろうとする七つの光。それに對抗するかの様に幾度も蘇る炎。

「警告、第六章十三節。新たな敵兵を確認。その術式は曲解した十字教の教義をルーンに記述したものと判明」

「行け、能力者！」

最早、一瞬しか力を発動出来そうになかった。

眼帯をつけている暇も無い。天城尊をただ右目を瞑り、たったの数メートルしか無い距離を駆ける。

「『これより神の支配を告げる』は敵兵に効果が見られません。直ちに對十字教術式に変更。『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』」七色の光が血に染まるように真紅へと変化した。

それと同時に魔女狩りの王の再生速度が一気に落ち、光の柱に押されていく。

恐らく後数秒しか持たないであろう魔女狩りの王。

しかしそうしている間にも、天城尊はインデックスへと距離を詰めていた。

ギリギリまで閉じられていたその右目は、最後に再び輝きを取り戻す。

（俺が魔術師を助ける、か。いいぜ、助けてやろうじゃねえか）
その澄み渡った青は、何を映し出すのか。

（魔術師を、じゃなく、魔術師からな！）

全てが砕け散るように、魔法陣は壊れた。

触っただけで粉々に砕けてしまったガラスの様に、

「警告……最終……第……、『首輪』致命的な、破壊……再生、不……」

そこで、インデックスの声を途絶えた。プツッと糸が切れたマリオネットの様にベッドに倒れこむ。

それを見た天城尊も、ふっと瞳から青い光りが消えた。

仰向けに倒れこんだ天城尊だったが、その顔は何か満足のいった、そんな表情にも見えた。

第五話 「自動書記」(後書き)

感想等ありましたら、よろしく願います。

第六話 「風紀委員」 (前書き)

この物語はネタをフル活用したいと考えてます。
どれだけお気に召してもらえるか分かりませんが、
頑張ります。

第六話 「風紀委員」

6

「まあ、軽い過労だろう。体の傷も擦り傷みたいなモノだから痕が残る事もないだろうね」

大学病院の病室で医師はそう言った。

あまりにもカエルに似たその医師は自らそう自覚しているのか、胸元のIDカードにアマガエルのシールを貼り付けている。

「はあ」

と天城尊は頷くしかなかった。

傷の他に、体の彼方此方に筋肉痛の様な症状が出ていたが、誰にやられたわけでもなく自分自身の能力の所為なので、どうしようもない。

全身に湿布を貼ると言う学園都市にしてはアナログ的な処置を施されそうになったが、あの鼻にスウっとくる匂いが体に残りそうだったので、天城尊は丁重にお断りしていた。

「それにしても、君も災難だったね。まさか夏休み初日から病院に入院する事になるなんて、もしかして君もナースが好きだったりするのかな？」

「御生憎、そんな変な趣味はないですから」

『も』と言う辺り、もしかしたらこの医師はナースが好きでこの業界に入ったのかもしれない。

診察が終了するとカエル顔の医師は部屋を出て行く。

一応、一日くらいは入院して様子見だそうだ。

医師が出て行くと同時に、知った顔の少女が入ってきた。

黒い修道服を纏った少女。

フードで見えないが白銀のミディアムヘアに、白い肌は服が黒い為により一層際立っていた。

名をメル・メリーロウと言う。

メルは部屋に入ると、テクテクと天城尊のベッドの傍に来ると、先ほどまでカエル顔の医師が座っていた椅子へと腰掛けた。

「大丈夫……かな？」

「ああ、大丈夫だ。別にこうなるのが初めてって訳じゃないから」その言葉を聞くとメルの表情は少し明るくなった気がした。

「ゴメンね。私の力が使えればあの時直ぐに君の傷を癒せてあげられたんだけど」

せつかく明るくなった表情が一瞬でシヨボンとなった。

天城尊がこうなった事に何故か責任を感じているのか、傷を癒す事が出来ない事を悔やんでいる様にも見える。

「気にするな。見ての通り大した怪我じゃない。それより、使えないってどう言う事だ？」

「君の力と似たようなモノ。そう何度もポンポンと使えるような力じゃないんだよ。使用制限じゃないけど、あの力は私自身にも負荷が掛かるからね」

メルは昨日、インデックスを助ける為に『神の涙』を使ってしまった。詳しい事は分からないがその為今はその力を使用する事が出来ないと言う。

「そう言やあ、あの子はどうなった？」

メルの『神の涙』を使い。天城尊の『神の目』を使い救った少女、インデックス。

天城尊は気を失った後どうなったのかを知らない。

あの子を苦しめていた『毒』である『鎖』は天城尊の手によって破壊されたハズ。

「あ、そう言えば忘れてたよ」

メルは部屋の入り口まではや足で行くと一人の少女を連れてきた。背丈はメルと同じ。髪の色も白銀で違うのは長さだけ。

メルとは正反対の真っ白な修道服に身を包んだエメラルドの様な瞳の少女。

インデックスだった。

「私を助けてくれた人？」

インデックスは首を傾げながら訊ねる。

「まあ、一応助けたって事になる、のかな？」

助けた人、となればあの魔術師達もそうなるだろう。メルだってそうだ。天城尊一人ではない。

「ありがとう」

インデックスはただ一言そう告げる。

自分がどういった立場にいたのかインデックスは知っていたのか、その一言には色んなモノが詰まっている様にも聞こえた。

「俺だけの力じゃないけどな。所で、あの二人は？」

インデックスはすっかり元気になっている。少女の体を蝕んでいたモノを取り除き、これであの二人の想いは叶ったハズだ。

しかし、その肝心の二人がインデックスの傍にいない。

一緒に喜びたいはずの二人がいない。

「あ、その事だけどね」

とインデックスは思い出すように、

「言われた事をそのまま伝えるよ？ 『君と馴れ合うつもりは無いが一応礼は言っておくよ。君が手伝ってくれたお陰であの子は救われた。これは紛れも無い事実だからね。僕達はこれから一度教会に戻る必要がある。『首輪』が取れてしまった事を知った教会はあの子を至急連れ戻したがついていたんだけど、僕達を騙していた事を問いただすとあっさり現状維持ときやがった。実際には様子見つてとこかな。だからあの子はそこに置いて行くよ。連れて帰るには色々問題があるからね。くれぐれも手は出さない様に。無論、近くにいた付属品も一緒にね』。だって」

紙に書いた文章を読み上げるようにインデックスは話したが、多少ステイルと思われる口調を織り交ぜていたのは彼女のアドリブだろう。

誰から言われたのか名義は無かったが、そのままを伝えてくれた

お陰で聞くまでも無く誰からかは分かった。

「だって、って言われても……預かるの？ 俺が？ お前とコイツを？」

「コイツじゃなくてメルだって。そろそろ本当に呼んで欲しいかも、って私付属品扱い！？」

「ちなみに私はインデックスって呼んでくれたらいいかも」

何か、もう居候が決定してしまっているみたいだ。

学園都市に魔術師が二人、それも男子寮のあの狭い部屋に三人。

喜ぶシチュエーションなのだろうが、全くそんな気にはなれそうに無かった。

「ふん、今日初対面にもかかわらず名前を呼んでもらおうなんて、甘いんだよ。私だってまだ無いもん」

「貴方も昨日出会ったばかりだって聞いたけど？ 先輩面してるけど、一日じゃどんぐりの背比べだね」

「む、禁書目録だからって調子に乗らない方がいいかも。普段じゃ魔術も使えないくせに」

「調子に乗ってないもん。寧ろ気を使って疲れるタイプかも。ちなみに魔術が使えなくても、貴方の纏っている『アイギスの盾』の防御結界くらいなら、紡いでいる糸の僅かな解れを見つけ出して割り込む事くらいは出来るよ」

「ぐうう、魔術師のくせに、生意気なヤツ」

「そう言ってる貴方も魔術師だよな」

白と黒は反発しあうモノなのか。

一体何を言い合う必要があるのか天城尊にはさっぱり分らない。「おい白いの、お前はいいのかよ。初対面の俺なんかの所に来てもん？ とインデックスは、そんな事？ みたいな顔で振り向くと「だって貴方がいい人だから」

確か初対面のハズだが、と天城尊は思う。

にも拘らず、少女は何の疑いもない笑みで笑いかけて、本当に純粹だった。その笑みは優しい。

二人の魔術師がこの少女を救いたいと願った気持ちが無くなる気がする。

もちろん、気がするだけ。

「おい、白いのと黒いの、いい加減にしやがれ」

相手は魔術師。

天城尊は魔術師が好きでは無い。
が、

（こう言うのも悪くはない、か）

ちなみに、メルとインデックスが後で看護婦から静かにしてくださいと注意を受けたのは言うまでも無い。

時期を同じにして、一人の少年が街中を歩いていた。

服装は白いカッターに黒色のズボンと言う、どこにでもありそうな制服だった。

黒いサラサラのショートヘア、整った顔立ちにはまだ幼さが残っており、部類的には『かわいい』に入りそうだ。

さらに、腕につけられた盾をモチーフにした腕章。
ジャケット

風紀委員。

能力者や学生達によって構成される治安維持機関である。

腕につけられた腕章は風紀委員である証。

「おい、話しが違うじゃないか!？」

「コイツが欲しいんだったら、もう十万持って来るんだな」

裏路地の辺りから声が響いてきた。

元々人通りの少ないこの辺りでは、以外にも人の声と言うものがよく響く。

お陰で会話は丸聞こえだ。

「十万でそれを譲ってくれるって話しだっただろ！」

「実はつい最近サイトが閉じちゃってさあ、値上がりしたんだよ」
声のする方向へ移動した少年が見たのは、不良らしき二人組と一人の学生だ。

かつ上げに似たものか、と少年は思う。

科学最先端を行き、超能力者を生み出す学園都市。その街中においてもこう言った行為は収まることをしらない。

その為に風紀委員なんて呼ばれる機関が出来たのだ。
名の通り、風紀を正す。

この様な行為を見てしまったからには対処しなければならない。
もちろん、例え風紀委員でなくとも見過ごしていいと言うルールはないが、

この街の優劣は能力で決まってしまう。

能力を持たない者が飛び込んで、何も解決に繋がらない。

残酷にも聞こえるが、そう言った場面が多く存在してしまうのもまた事実。

だからこそ力を欲する者が多く現れる。

正しい事に使うか悪に使うかは別として。

「つてな訳で、幻想御手^{レベルアップバー}が欲しければ金を持って来るんだな」

その言葉を聞いて、少年は歩み寄る。

^{ジャッジメント}
「風紀委員です。拘束理由は、恐喝ってトコですかね」

「ちッ、風紀委員。なんで態々こんな所に……って」

振り向いた不良らしき二人組は一瞬言葉を失って、

「ギャハハハッ、どんなヤツかと思いきや、風紀委員も人手不足かあ??」

その見た目で笑いこけた。

身長は一五〇センチと言った所か。見た目中学生、下手すると小学生にも見える外見。

何より、まだ幼さの残る表情が不良たちの警戒レベルを一気に下げた。

「ガキは引っ込んでな。俺達は大人の会話中なんだ。それとも何だ」
不良の一人は自ら一步前へでると、

「レベルアップした俺の餌食にでもなりたいか？」

轟！ と不良の手のひらから炎が生み出された。

見たところ強能力者^{レベル3}と言った所か、上位能力者の部類に入る能力である。

へへへ、と能力を見せただけでまるで勝ったとも思ふ表情。

「ガキ……」

少年の手がピクピクと動いていた。

俯き加減のその姿勢は相手から見れば怖気づいた様に見えたのか、
せせら笑う声が聞こえてくる。

「その言葉」

少年は足元にあった石ころを見つけ、

「僕のルートではバットエンド確定ですよ」

瞬間、

蹴り飛ばした石ころが急激な突風と共に不良の頭へと激突した。

何が起こったのかも分からないまま、^{バイロキネシスト}発火能力者と思われる不良

は地面へとノックアウトする。

「な！？ テメエ！」

「ちゃんと言いましたよ？ 拘束するって」

「へ、へへ、^{エアロシューター}風力使いつて訳か。なら、その風より早く俺の電撃で
やつちまえばいいんだろ！！」

数本の雷撃が不良から放たれた。

これも恐らく、強能力者と言った所か。

「後、風力使いとは言ってますね」

少年が腕を振るうと、不良が放った電撃が誘われるようにその振
るった方向へと移動し、壁に激突する。

「そんな、どうして……ッ。壁に、水？ まさか、水で電気の通り
道を？ いや、待てよ。おいお前、何で二つも能力を！？」

「答える義務はないですが、そうですね、気絶する前に一つだけ

「

少年は指を一本立てると、

「足元注意です」

バチバチ、と体に電気が走った。

不良が足元を見た時には既に遅かった。そこにあったのは、いつの間にか辺りを囲んでいた水。それは少年の足元から続いており、そこに電気が走った。

生憎、不良はサンダルを履いていた為成す術なし。まあ、例え靴を履いていたとしても結果は変わらなかっただろうが。

黒焦げにはならなかったが、不良は意識を失って地面に倒れた。電気使いだと言うのに、感電によって意識を失う。何とも屈辱的な負け方ではあったが、そもそも、不良の生み出す電気と、少年の生み出した電気では多少方式が異なるので仕方が無いのかも知れない。

少年は一息つくと、壁際に座り込んでいた学生へと近づいていく。

「大丈夫でしたか？」

「あ、あんた、まさか……デュアルスキル多重能力者」

多重能力者。

二つ以上の超能力を扱う能力者の事。

現実、その実現は脳への負担が大きい為不可能とされている。

そして、今の戦いで風を操り、水を生み出し、電気を放つ。

三つもの能力を見せた少年を見て、彼はそう言った。

しかし、

「いえいえ違います」

少年は軽く微笑んでこう答えた。

「僕は単なる雲使いクラウドですよ」

第六話 「風紀委員」(後書き)

感想やご指摘等あればよろしく願います。

設定 1

《人物情報》

あましろ みこと
・天城尊

【設定】

学園都市のとある高校に通う一年生。身長は一七〇センチ程度で、短髪黒髪（某主人公のツンツン頭を短くした感じと捉えてもらえば）で常に右目には眼帯が装着されてある。

魔術師と能力者の血が流れていると言う特別な体質でもあり、その為学園都市の学生でありながら、魔術の存在を知っている。ただ、魔術師によって親を殺された過去を持つ為、殺したいほど憎んでいる訳では無いようだが、魔術師は好きではない模様。

学校では優等生（とある学校の中では）が多い黄泉川愛穂のクラスに所属し、その中でも唯一の手のかかる生徒と認識されているようだが、黄泉川曰く真面目なのか不真面目なのか分からないヤツらしい。

【能力】

『神の目』

学園都市での身体検査では無能力者扱いされる力。
システムスキャン レベル0

右目に装着してある眼帯を外す事によってその力は解放され、超能力であろうと魔術であろうとその力を分析し、同等の力をぶつける事によって相殺してしまう。ただ、同等の力という事は超能力には超能力の方式を、魔術には魔術の方式を使用していると思われるが、天城尊は両方の血が流れているので、使用が可能と自分自身で推測している。

また、能力開放時には同時に身体能力が格段に向上する。その力

は世界に二〇人といない聖人と思わせるほどのモノで、しかしそれ故に短時間しか発動する事が出来ない。

尚、眼帯を外すとその瞳は青い光を放つ。

・メルⅡメリーロウ

【設定】

魔術師から逃げていた所で、天城尊とぶつかったのが出会い。

黒い修道服を纏い、その髪は白銀のミディウムヘアで、肌は白い。

ネセサリウス

イギリス清教、必要悪の教会に所属する魔術師、らしいが、所属していた時は両親を魔術師に殺されたと言う過去から記憶を失っていた。そして天城尊と出会う一ヶ月ほど前に記憶を取り戻したらしく、イギリス清教から逃亡した。

ステイルや神裂は、彼女が逃亡した後にその体に特別な力がある事を知らされ、その力を借りる為にメルを追う事となる。

過去にあった事から魔術師を嫌っているが、自分自身も魔術師と言う複雑な状況に陥っている。

とりあえず、天城尊に名前でもらいたいらしいが、今の所『お前』『アイツ』『黒いの』『止まり』。

天城尊の部屋には付属品として居候させられるようだ。

【能力】

『神の涙』

あらゆる傷を癒し、毒を洗い流し、浄化する力を持つ能力。

メル自身も自分の力について理解している様で、追ってくる魔術師はこの力を狙っていると推測していた。ただ、ステイルや神裂がどのような理由でこの力を必要としていたか知る由もなく、一ヶ月もの間逃亡する事となる。

ただ、その力はポンポンと使用できるモノではなく、使用した後は一定の時間を置かなければ使用する事が出来ない。故に、天城尊

の怪我も治してあげることが出来なかった。

『アイギスの盾』

メルが纏っている修道服。

本来であるならば盾であるが、山羊の皮を修道服に織り込む事み魔術的意味を抽出する事によってその絶大な防御力を生み出している。

ただ、『歩く教会』と比べてしまうと、その防御力の差は歴然らしい。

またインデックスが言うには、糸の解れを見つけ出す事によって防御結界に割り込む事が可能なようだ。

・インデックス

【設定】

イギリス清教、必要悪の教会ネセサリーウスの保持する魔道書図書館、禁書目録。長い銀髪と緑色の瞳を持つ少女で、白い修道服を纏っている。

完全記憶能力と言う性質を持ち、その頭の中には一〇三〇〇冊の魔道書が記憶されている。その為、魔道書の毒によって記憶が汚染され、一年毎に記憶を消去しなければならないと言う運命を背負っていた。

その為、ステイルと神裂はその毒を浄化する為にメルを持つ『神の涙』を必要としていたが、実際の原因は毒による汚染ではなく、教会によって刻まれた魔術によって、『一年毎に記憶を消さなければならぬ』体質へと変化させられていた。

天城尊によってその魔術を打ち消す事に成功し、いきなりではあるが天城尊の部屋へ居候する予定。

第七話 「御坂美琴」 (前書き)

もう一人の主人公です。

能力も珍しいと思うので、少しでも楽しんでいただけたらと思います。

第七話 「御坂美琴」

いつもそこは真っ白な空間だった。

右も左も上も下も分らない。

浮いているのか立っているのかも分らない。

そこには何も無く、どこまでも続く色の無い世界。

頭がボーっとする。思考が纏まらない。それどころか体の自由が利かなかった。

金縛りとはまた少し違う、その場所に押さえつけられているそんな感じ。

そして、決まってその場所には少女がいた。

真っ白なワンピースだろうか。もしかしたら色があるのかもしれないが、この世界ではそれは白だった。

君は誰？

だが、声は聞こえない。

体も声も、何もかもが縛られている。

いつも、何度も、声は届かない。

触れようと手を伸ばしても、そこに手は届かない。

今日もそうやって、意識が遠退いていく。

雷を操り、風を操り、水を生み出し、氷を作り出す。多重とも言われしその力は

『雲使い』

風紀委員一七七支部。

夏休み初日にも拘らず、風紀委員である白井黒子と初春飾利は朝早くからこの部屋へとやって来ていた。

「初春、例の幻想御手^{レベルアップ}について何か分かりましたの？」

常盤台中学の制服を着た、茶髪のツインテールの少女、白井黒子は、現在パソコンと睨めっこをしている初春飾利に訪ねた。

「すみません、白井さん。幻想御手についての書き込みは一杯あるんですけど、それがどんなモノなのかって言う書き込みは一切ありません」

頭の上に花を模った髪飾りを大量にしている初春はプハアと背もたれに背中を預けた。

白井や初春が調査している幻想御手は、現在学園都市の中で問題になっているモノだ。

使用するだけで能力のレベルが上がる、幻想御手。

低能力者にとって、まさに夢のアイテムだ。

当初は都市伝説とささやかれていたモノに過ぎなかったのだが、現にそれを使用したとされる事件も起きている。

最近で言うなら、^{グラビトン}虚空爆破事件。

犯人の能力者は、その爆破の威力から大能力者^{レベル4}クラスだと思われるていた。

が、実際その犯人のレベルは書庫^{バンク}のデータから異能力者^{レベル2}だと分かったのだ。

そして、一番の問題は

「そうですか。ですが早く見つけませんと、使用者が意識不明の昏睡状態に陥っているとの報告もありましたし、何としても現物を手いたしませんと」

「はい。私ももう少し調べてみます」

と、

「オッス、黒子。初春さんも」

扉を開けて入ってきたのは御坂美琴。

学園都市に七人しかいない超能力者^{レベル5}の一人。別名超電磁砲^{レールガン}。

「お姉様。能力でセキュリティを解除するのはお止めになって下さいな」

「御坂さん、おはようございます」

本来、入室には指紋・静脈・指先の微振動パターン^{エレクトロマスター}の三種のチェックをクリアする必要があるのだが、電気使用の頂点である御坂美琴にとつて、この様なセキュリティはあつて無いようなものだ。

「いやー、風紀委員じゃないけどさ。私になんか手伝える事ないかなあつて」

「御坂さんがいてくれれば百人力ですよー」

「まあ、確かに今は猫の手も借りたいくらいですけど」

「誰が猫の手よ」

事件が事件なだけに、正直超能力者^{レベル5}の御坂美琴が手伝ってくれると言つのはありがたかつた。

白井黒子も空間移動能力^{テレポーター}の大能力者^{レベル4}だが、御坂美琴自身の存在が大きい。

事件に関わっている者達は幻想御手によってレベル上げている者がほとんどだろう。そう言う能力者を相手していかなければならぬい^レのだから。

「そう言えば」

パソコンに向かつていた初春は何かを思い出したように、

「猫の手じゃないですけど、確か今日から異動されて来る人がいるんですよね？」

「そう言えばそうでしたわね」

「何々？ 新しい人来るの??」

「はい。でも遅いですね。予定ではそろそろ来てもいい時間なんですけど」

と、初春飾利は時計に目を向けた。

時刻は午前九時二〇分。

確か予定では九時頃にこの一七七支部へ出向いてくるはずだった。

そして、

シユン、と扉が開いた。

話しをしていた内容から、自然と三人の視線がそちらへと向く。

「あら、御坂さんも来てたの」

「あ、固法先輩。おはようございます」

部屋に来たのは白井黒子と初春飾利の先輩である固法美偉だった。

「あら、固法先輩でしたの」

「ちよつと残念です」

「私じゃいけなかったって言い方ね。じゃあ誰が良かったのかしら」
固法はかけているメガネをグツと中指で上に押し上げる。

要するに、メガネがピカツと光るあれだ。

「いえ、決してそう言う訳では ン？ そこに居られるのは？」
白井は入り口付近で立つ固法の後ろに、人影がある事に気が付いた。

彼女にすっぽりと埋まってしまっている為、固法が僅かに動いたときに見えたのだ。

「はいはいそうです。貴方達が期待してたのは私じゃなくてこの子ですよ」

多少ふてくされている様にも見えるが、固法も高校生という事で素直に通路を開けて、後ろにいた少年を部屋の中へと招き入れる。

「はい紹介ね。今日からうちに配属になった掛橋至君^{かけはし いたる}よ」

その少年は一言で言つと、

「やたらと、小さな方ですのね」

背が低かった。

パソコンの前にいた初春も席を立てて近くにいたので彼女と比較したとしても、一五三センチの初春よりも低い。

と言うよりも、背が低いだけでなく、とにかく幼いのだ。

発展途上。

「え、何これ？ か、かわいいい」

某ぬいぐるみを見つけた時に少し劣るくらいの反応をみせた御坂

美琴。

身長だけでなく、まだ幼さの残る顔は部類としてはやはり『かわいい』に入る。

が、そう言われて喜ぶ男子は小学生くらいまでだろう。

まして、年下に言われれば尚更である。

「あ、ちなみに彼、高校生だからね」

*

ええええええええ！？

と言う声が部屋の中に響いた。

「ホント、見かけで人を判断しないで下さい」

見た目中学生以下のかわいい系高校生、掛橋至はため息交じりに呟く。

異動初っ端でこの扱いは何か先が思いやられそうだった。

「ゴメンね掛橋君」

と、固法美偉も謝るが、何故かその謝り方も自分と何歳も歳の離れた子供に対して言っている様に聞こえる。

「もう慣れてますけどね」

「ゴ、ゴメンなさい！ まさか高校生だとは思わなかったから」

「ああ、気にしないで下さい。敬語とかは別にいいんで敬語はいいの？ と御坂美琴は訊ねる。

御坂個人としては、どちらかと言うと敬語とか使うのが苦手なタイプだったので、正直普通に話せたほうが話しやすかった。

改めて掛橋至は辺りを見た。

隣にいる固法美偉とは自己紹介を済ませてあるので分かっているが、残りの三人とは全く面識がない。

ので、

「改めて、掛橋至です。今日からこの一七七支部に異動になりました。よろしくです」

「あ、私、初春飾利です」

「私は白井黒子です」

「私は御坂美琴。よろしくって言っても私は風紀委員じゃないんだ
けどね」

御坂美琴？ と掛橋至は首を傾げる。

「常盤台の、超電磁砲^{レールガン}？？」

「ええそうですね。お姉様は学園都市に七人しかいない超能力者^{レベル5}の
第三位、超電磁砲^{レールガン}。御坂美琴お姉様ですの」

この学園都市でその名前を知らない人の方が少ない。

七人しかいない超能力者^{レベル5}。

その力は一人で軍隊と対等に戦える程と言われている。

「超能力者^{レベル5}に会えるなんて光栄だなあ。良かったら握手してもらえ
ませんか？？」

「へ？ 握手？ ま、まあいいけど」

御坂美琴の立場的に、学校の関係上女子からそうやって握手を求
められる事は何度かあったが、男子からそう言う要求をされるのは
初めてかもしれなかった。

御坂は何故か敬語を使つて来る掛橋至に対して、あれ？ 確か年
上だよね？ などと思いつつもながらもゆっくり手を差し出し、掛橋至は
その手をグツと握り締めた。

「どうもありがとう。いやあ、一度でいいから超能力者^{レベル5}と戦つてみ
たかったんですよ」

その言葉に一瞬、その場が凍りついた。

「な、何を仰つてますの！？ 異動直後に変な挑発をお姉様にか
けないでいただけます！？ そんな事されると」

「へえ、私と戦いたいんだ」

部屋の中に拘らず、御坂の髪先からバチンと火花が散った。

「やっぱりですの。貴方分かっていきますの？ お姉様は超能力者^{レベル5}。
並大抵の能力では敵いつこありませんわよ？ お姉様もお姉様です。
そんな挑発にすぐに乗る癖はお止めになつて下さいですの」

額の辺りに手を当てて白井は言う。

御坂美琴はこう言う事に関しては一切の妥協をしない。強い相手がいれば戦う。

言わば力試しが好きなのだ。

既に、学園都市の頂点の七人に入っているというのに。

「でも、売られた勝負は買わないとダメでしょ？」

「いいえ、買わなくても結構ですわ」

二人は握手をした状態のままだったので、御坂はゆっくりとその手を放した。

「で、そこまで言うくらいなんだから、貴方もそれなりの能力を持つてるって事よね？」

単純に考えれば、そう言う事になる。

超能力者^{レベル5}である御坂に対して、勝負をしたいと言ってくる。つまり、自分の力がどこまで通用するのかを試したい。

上位能力者にはよくありがちなパターンだ。

「んー。あるにはあるんですけど」

と、掛橋至は曖昧な答え方をした。

「僕的能力にはレベルが無いんですよ」

「は？ レベルが無い？」

「はい。一応、未能力者^{レベル5}って事になってます」

なんだそれは？ とその場の全員が思ったに違いない。

学園都市では能力者を六つのレベルに分けている。

無能力者^{レベル0}、低能力者^{レベル1}、異能力者^{レベル2}、強能力者^{レベル3}、大能力者^{レベル4}、そして超能力者^{レベル5}。

この六つしかない。

加えて言えば、未だたどり着いた者はいない、絶対能力^{レベル6}などと言うモノも存在するらしいが、言っている通り、そこへ到達した者はいない。

このカテゴリーの中を見ても、未能力者などと言う部類は存在しないのだ。

「へえ、区分すら出来ない能力って訳ね」

その御坂の表情を見た白井はやはり嫌な予感しかしなかったので、御坂に声をかけようと手を伸ばして、

「いいわ、相手になつてあげる。付いて来なさい」

やはりそうなつてしまった。

「お姉様、先ほど何か手伝える事はないかと、言つておられましたよね？」

「ああ、これ終わつてからね」

「う、貴方もそうですわ。異動早々仕事放棄とは風紀委員の名が廃りますわね」

「いえ、その事なら、今日は一日この区画の警邏つて事になってあるので、問題ないと思います」

「警邏つて、一体誰にそんな事を」

「あ、それ私」

と手を挙げたのは、固法美偉だった。

彼女は人差し指で頭をかきながら

「いやあ、異動してきたばっかだからこの辺り知らないと思って、ここに来るまでの間にお願ひしちやつたのよね」

「んまあ、何と言つ事を……つてあれ？ お姉様は？」

「御坂さんなら、もう掛橋さんを連れて出て行っちゃいましたけど」と、初春が指差す扉が、プシュと閉まった。

「ぐううう、あの男ッ、帰ってきたら許すまじ……ッ」

「何でそうなる」

固法はとりあえず突っ込んでみたが、白井がこのまま空間移動で追いかけてしまいそうだったので、

「はいはい、私達は例の事件の調査をする。分かつたらさっさと始めましょう」

直後に白井は調査の為に外へ出ようとしたが、個法に止められたのは言うまでも無い。

第七話 「御坂美琴」(後書き)

感想やご指摘等がありましたら、よろしく願います。

第八話 「掛橋至」

2

掛橋至と御坂美琴は河川敷に向かっていた。

超能力者^{レベル5}と戦ってみたいと言う掛橋至の一言で実現することになった御坂美琴との一戦だったが、街中でどんぱち起こす訳にもいかず、人気のない河川敷へと向かうこととなった。

もちろん、警邏と言う自らの仕事も忘れることなく、周囲に気を配りながら掛橋至は御坂の後に続いていた。

「てか、あんたはどうして私と戦いたかった訳？」

何気に御坂が訪ねた。

「力試しです」

と、掛橋至は単調に答える。

あまり良好な返事とは思えなかったが、御坂にとって『力試し』と言う言葉は嫌いな事ではない。

むしろ、自分自身が超能力者^{レベル5}でありながら、自分の力を試す事が好きなので、この少年（先輩）の気持ちが何となく分かるような気がしなくともない。

能力者と言うモノは自分の力がどこまで通用するか試したいモノである。

「ふーん、力試しねえ。そう言うの嫌いじゃないわ」

それに、掛橋至は未能力者と言っていた。

そんな力テゴリーが存在するのは分からないが、自分自身の能力がそうであった場合、恐らく御坂自身も力試しがしたいと言う気持ちになったかもしれない。

「その代わり、手は抜かないから怪我してもしらないからね」

「それは承知してますよ」

仕事熱心なのか、返事を返しながらも掛橋至は辺りの様子を伺い

ながら移動している。

街中を通ってきたが、夏休みと言うこともあって、午前中にもかかわらず学生の姿が多く見受けられた。街中でやらなくて正解だったようだ。

「そろそろ着くから」

目的地である河川敷が見えてきたので御坂は掛橋至に告げる。都市部からは離れた位置にあるので、人の姿は見えなかった。

これで、思う存分やれそうね。と御坂がつぶやくと同時に、

「そうでもないみたいですね」

河川敷の傍までやってきて、河に架かる鉄橋の下で学生達が屯している姿が目に入った。ざっと一〇人ほどのグループは見た感じ、不良と呼ばれる学生達のような。

肌に刺青を入れていたり、スキンヘッドがいたり、見かけで判断するのは良くないが、そんなオーラがプンプンしていた。

「へへ、聞けよ。俺も幻想御手^{レベルアップ}で強能力者になったぜ」

大声で自慢しているのか、その不良達の会話は少し離れたところにいる掛橋至と御坂の所にまで聞こえていた。

と、その会話を聞いて掛橋至はピクツと反応した。

「御坂さんはちょっと待っててもらえますか？」

「どうしたのよ」

「仕事ですよ。風紀委員^{ジャッジメント}の」

そう言いながら、腕章を付けた掛橋至は河川敷の傾斜を下って行き、不良達へと近づいて行く。

その行動に不良の中の誰かが気がついたのか、ザワザワとつぶやきながら全員が一斉に掛橋至へと目を向けた。

「風紀委員^{ジャッジメント}です。訊きたい事があるんですが、質問に応じてもらえますか？」

「は？ 風紀委員^{ジャッジメント}って、ただのガキじゃねえか」

「へへ、それに後ろに常盤台のお嬢様までいるぜ」

掛橋至が後ろを見ると、すぐ後ろに御坂美琴がいた。

待っててと言ったのに、意外と首を突っ込みたいタイプなのかもしれない。と掛橋至は思う。

「幻想御手、^{レベルアップ}持ってますね？」

あ？ と不良達の表情が変わった。

「持ってたかどうか？」「

もちろん、回収します」

掛橋至がそう言う和不良達は顔を見合わせてうすら笑い、

「この人数相手ですか？ 言っとくが俺たちは無能力者^{スキルアウト}じゃねえぜ？」

強化された自分の能力に余程の自信があるのか、風紀委員^{ジャッジメント}と言う肩書きだけでは、協力してもらえそうにない。

「何なら、ガキ二人まとめて相手してやってもいいんだぜ？」

常盤台の少女が、超能力者^{レベル5}と言う事を知ったらどんな反応を示すのか見てみたい、と言う気持ちもうつすらとあったが、それ以上に掛橋至には気に食わない事があった。

「ガキ？」

「てか、風紀委員も人手不足か？ こんなガキを風紀委員にするなんてよお」

と、

ドス、と不良の一人が地面に倒れ込んだ。

先ほど、ガキと言った不良だ。

「おい！ どうした！？」

急な事に慌てる不良達。

ふと目線を落とすとそこには野球の球ほどの大きさの氷が地面に転がっていた。

不良が前向きに倒れ込んだ事から、どうやらそれが後頭部に当たっただけらしい。

「もう一度訊きます。^{レベルアップ}幻想御手、持ってますね？」

「チツ、てめえの仕業か」

ゾロゾロと交戦する構えを見せ始める不良達。

人数で上回っている分、一人減ったくらいでは姿勢は変わらなか

った。

むしろ、先程よりも攻撃的になってしまった感がある。

それを見た掛橋至は後ろをチラツと振り向くと、

「下がっていて下さい。これは風紀委員^{ジャッジメント}の仕事なんで」

御坂も素直に後ろに下がった。

彼女にとっては珍しい行動であるが、相手が強能力者^{レベル3}であることや、掛橋至の能力がどんな物かみたいと言う気持ち優先しただけだろう。

不良達は掛橋至を覆う様に弧を描くと、内の一人が手のひらから炎を生み出した。

「氷結能力なら、俺との相性は最悪だな。大丈夫だ、火傷くらいで済ませてやるからよ！」

投げつけられた炎の玉は強能力者^{レベル3}と言う事もあって、以外にも大きい。先ほどの氷の塊など優に超すほどの大きさを持っていた。

本当に人に当たってしまったら、火傷くらいでは済まないかもしれない。

が、

ズボつとその火球が掛橋至を突き抜けた。

「は？」

不良達は目を疑うが、通り抜けた火球は地面に当たって吹き飛んだ。

よく見てみると、掛橋至の周りを薄り煙の様なものが被っていた。そしてその煙の中から掛橋至が現れたと思うと、先ほどまで見えていた掛橋至の姿はなかった。

「クツ、てめえ」

不良が何かを言おうとしたが、それよりも早く掛橋至が前に出した手から氷の塊が生み出されていた。それに気がついた不良も手から炎を生み出し、同時に放たれた炎と氷は互いを打ち消し合い空中で消滅する。

「てめえ、氷結能力者じゃねえのかよ！？　なんだその煙は！？」

と、ドスつと不良がまた倒れた。見ればまた氷が地面に転がっている。先ほどと同じ手口だ。

「クソ、全員でやつちまえ！」

それぞれ、炎や風、土を造形して武器を生み出したりと多種多様の能力を見せつけるが、不良達はまだ気がついていなかった。

ポツ、と不良の頬に雨粒が当たった。

なんだ雨か、と普通なら思つかもしれないが、

「おいおい待てよ」

不良の一人が大事な事を思い出した。

雨足は少し強くなり、衣服だ濡れる。

しかし、そんな事は起きるはずがない。

なぜなら、ここは鉄橋の下に位置するからだ。雨が真上から降ってくるなどありえない。

なら、どうしてか？

上を向いた不良は、そこでようやく気がついた。

先ほど、掛橋至の周りを被っていたモノと同じようなものが自分たちの上部にあったのだ。

そして、それが雨を生み出している。

ならば、答えは簡単だ。

「てめえ、まさか雲を操って……」

「今日の天気は晴れ時々にわか雨」

そして、掛橋至は静かに告げる。

「落雷にご注意」

瞬間、バリバリと音を立てて不良達目掛けて雷が落ちた。服は濡れていて、周囲にいる不良達皆に電気が走った。

全身が黒こげになることはなかったが、意識を刈り取るには十分過ぎる威力だ。

本来であるなら、幻想御手について訊きたい事があったのだが、こうなってしまった以上意識が回復するのは当分先になりそうだ。加えて、

「はあ、また幻想御手壊れちゃったかな……」

以前、幻想御手の取引現場を目撃したときは、それは音楽機器だった。その時も回収すべき幻想御手を再起不能にってしまったのだが、また同じ過ちを犯してしまったみたいだ。

掛橋至は一応、不良達のポケットから幻想御手を取り出すと、携帯で救急車の要請と警備員への連絡を済まし、御坂美琴の元へと戻った。

本来の目的を果たすためだ。

「雲を操る能力？」

掛橋至が傍に來ると同時に御坂は尋ねる。
クラウド

「雲使い。それが僕の能力です」

御坂にとっても初めて聞く能力だった。

「で、どうします？ もう少して警備員とか来ますけど？」

態々騒ぎにならない様に人気のない河川敷に來たにも拘わらず、
アンチスキル
警備員の前でどんぱち始める訳にもいかない。

「私としても、戦ってみたいって気持ちはあるけど、それ、持って帰らないといけないんじゃないの？」

御坂は掛橋至の持つ幻想御手を指さして言う。
レベルアップ

「そうですね。一度支部に戻った方がいいかもしれません」

前回は大破してしまったが、今回は形が残っているだけでも良い方か。

とりあえず、この後御坂美琴と戦ってこれ以上壊れる様な事だけは阻止しなければならない。

残念ではあるが、超能力者との対戦は次回に持ち越しと言う事になりそうだ。
レベル5

と、ここで御坂美琴の携帯電話の着信が鳴った。
ちよつとゴメンね、と御坂は携帯を取り出して。

「どうしたの黒子？」

電話の相手は白井黒子だった。

「え？ 隣にいるけど？」

御坂は掛橋至に携帯電話を差し出す。

「黒子からあんだにだって。緊急みたい」

そして、掛橋至は携帯電話を耳元に当てた。

第八話 「掛橋至」 (後書き)

感想等ありましたら、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3571v/>

とある二つの領域交差

2011年9月11日03時20分発行